

CASSIOPEIA—UHC達成に向けて、対象の5つの病院における、5つ星に輝く質の高い医療ケアサービスを目指して

JICA ルサカ郡総合病院運営管理能力強化プロジェクト



フロアマネジャーの業務を学ぶためにチパタ病院を1週間訪問したマテロ病院のフロアマネジャー。患者さんのバイタルを測定している様子。

マテロ病院のフロア
マネジャー、チパタ
病院での研修を成功
裏に終了

医療機器管理の報
告業務:標準作業手
順書により維持に備
える

日本とザンビアをつない
だ国際ワークショップ:ザ
ンビア国別研修の成果
を発表

オリバー・カオマ医師、日
本での薬剤耐性対策研
修を語る



マテロ病院のフロアマネージャー、チパタ病院での研修を成功裏に終了



フロアマネージャーたち。左から、ハリエット・ムレンガ氏(マテロ病院)、プレシャス・ムワナ氏(チパタ病院)、プレシャス・ムワンザ氏(マテロ病院)、グラディス・カオマ氏(チパタ病院)

マテロ病院は、ザンビアでフロアマネージャーを採用した2番目の公立病院となりました。最初にフロアマネージャーを導入したのはチパタ病院です。この取り組みは、JICAが2023年に日本で開催した2週間の知識共創プログラム(KCCP)にルサカ郡の対象5病院の院長、病院事務長、看護師長が参加し、研修で学んだコンセプトを医療現場に応用したことで始まりました。

日本での研修の目的は、病院運営に関する日本のアプローチや経験をザンビア人研修生が学び、ザンビアの医療現場に適した実践方法を検討することでした。研修を通じて、研修生たちはザンビアの病院では患者の待ち時間が長いなど、医療サービスのアクセスに改善の余地があると再認識しました。この問題に対処するため、チパタ病院の経営陣はフロアマネージャーの導入を決定しました。

フロアマネージャーとは、患者が施設内を移動するのを案内し、サポートすることを主な役割とするスタッフです。その業務は、バイタルサインの測定補助から、緊急

時に診察への迅速なアクセスを確保するなど、多岐にわたります。

マテロ病院でフロアマネージャーへの採用が決まっているハリエット・チムウェンバ・ムレンガ氏は、2025年1月13日から17日までの1週間、チパタ病院でフロアマネージャーに関するオリエンテーションを受けました。ムレンガ氏は、たくさんの患者さんが来院し、対応が追いつかない場合は、ポーターの支援も自身の役割だと語りました。他にも、地域住民が運んできたご遺体を、看護師や医師が対応するまで、適切に保護する仕事もあります。

同僚のプレシャス・ムワンザ氏によると、フロアマネージャーの仕事には、患者のバイタルサインを測り、トリアージを支援し、救急患者が必要な検査や診療科へスムーズに移動できるよう支援することが含まれます。長時間待つことが難しい高齢者や妊婦、幼児にも、これらの支援を提供します。特に幼いこどもは、待ち時間が長いと嫌がります。乳幼児は、待ち時間が短くなることで、感染のリスクを減らせます。(次頁へ続く)

ムレンガ氏は、「私たちは、患者さんを直接支援できます」と述べました。例えば、高血圧の患者さんが診察を待っているならば、その間に薬を受け取れるように手助けしたり、検査を受けるために検査室へ案内したり、健康保険（NHIMA）病棟で、診療を円滑に受けられるようにします。

チパタ病院のフロアマネージャーたちは、マテロ病院からの訪問者に自らの経験を惜しみなく共有しました。プリスカ・ムソング氏とグラディス・カオマ氏は、マテロ病院から訪れた3名の同僚の熱意を称えました。そして、「チパタ病院で実践した、患者への献身的な姿勢を今後も維持してほしい」と励ましました。ムソング氏は「フロアマネージャーは患者さんが適切な場所へ行くための病院の案内標識です」と述べました。また、「患者さんに質の高いケアを提供するには、ポーターや臨床医、医師などと円滑に連携することが欠かせません」と助言しました。

カオマ氏は、「フロアマネージャー

は病院の顔なので、特に高齢の患者さんには敬意をもって接することが大切」と語りました。また、2024年3月にこの仕事を始めた当時と今では大きな違いがあり、患者さんや地域社会からフロアマネージャーに対して感謝の声が上がっていると述べました。

マテロ病院のフロアマネージャーは、研修の機会に感謝するとともに、「新たなスキルを習得し、同僚から学ぶことの重要性を再認識した」と述べました。そして、「フロアマネージャーの必要性を病院運営陣に理解してもらうため、一所懸命に努力します」と決意を表明しました。彼らは、「患者さんたちは私たちの活動を見ており、マテロ病院での私たちの取り組みを周囲の人々に広めてくれるでしょう」と語りました。

最後に、患者さんを容易に識別できるように、識別票と名札の導入が必要です。また、チパタ病院の視察から、臨床医や医師との協力が重要であることをマテロ病院の運営陣に伝えたいと語りました。



患者ファイルを調べて、必要な支援のレベルを判断するフロアマネージャーたち

医療機器管理：標準作業手順により報告業務の維持に備える

ルサカ郡保健局 (LDHO) は、2023 年より、対象5病院に対して、医療機器の稼働状況の報告を求めています。

2024年11月には、全ての対象5病院で、報告率がプロジェクトの目標である75パーセントに初めて達しましたが、この成果を維持することが課題となっています。

現在、報告される電子ファイルの命名規則は統一されていません。そのため、郡保健局 (LDHO) では、どの病院が既に提出していて、どの病院が未提出なのか、状況の確認が難しい状況です。報告状況の確認が遅れると、報告が未提出だった場合に、対応が遅れるケースが確認されています。また、病院側では報告書を提出したと認識していても、実際には郡保健局 (LDHO) に届いていないことがあり、この確認の遅れも、対応の遅延につながっています。

こうした課題を解決するため、郡保健局 (LDHO) の医療機器技術者であるオベド・サムシク氏は、2024年12月にカシオペア・プロジェクトのジョセフ・チゾンゴ氏と協力し、対象5病院向けの標準作業手順書 (SOP) を作成しました。

このSOPには、報告内容、提出期限、報告方法やファイルの命名規則のほか、報告手順を確実に実施する方法や、提出遅延や他の基準不適合が生じた際の対応策が定められています。

ルサカ州保健局とルサカ郡保健局では、このSOPの導入に向けて、ルサカ郡の医療機器管理担当者が一同に介する会議の開催を2月に計画しています。標準化された報告手順の導入により、報告業務の効率化が期待され、プロジェクトの成果の維持につながると期待されています。



オベド・サムシク氏：ルサカ郡保健局の医療機器技術者。2025年1月30日にルサカ市のインターコンチネンタルホテルにて開催されたKCCPオンライン合同会議での様子。

日本とザンビアをつないだ国際ワークショップ： ザンビア国別研修の成果を発表

1月30日(木)、ルサカ市のインター・コンチネンタルホテルにて、日本とザンビアをオンラインでつなぐ国際ワークショップが開催されました。このワークショップでは、訪日中のザンビア人研修生が、研修の成果を発表しました。

今回の研修は、「病院運営管理強化に向けた日本の取組みと経験（感染予防管理と医療機器管理）」をテーマに、日本の医療機関で2週間にわたり実施されました。ルサカ州保健局（LPHO）、ルサカ郡保健局（LDHO）、および5つの対象病院から計14名のザンビア人研修生が参加しました。

研修生たちは、日本の病院を訪問し、病院マネジメントについて学びました。得た知識をザンビアの医療機関で活用することが期待されており、日本の医療サービス提供における課題や対策事例を学びながら、ザンビアの医療サービスの改善に応用する方法を模索しました。研修日程の終盤には、帰国後に実施するアクションプランを策定し、報告しました。

ワークショップでは、対象の一次レベル病院の感染予防管理チーム（環境保健技師2名、看護師2名、医師1名）と医療機器技術者（5名）に加えて、郡保健局（LDHO）の臨床ケア専門家および医療機器技術者、州保健局（LPHO）のシニア環境保健技術者および主任看護師が、研修を通じて得た知識を基にして策定したアクションプランを発表しました。ザンビア側の参加者からは、実践的なフィードバックが寄せられました。

ワークショップの座長であった州保健局のシムリアマナ・チョオンガ局長は、研修生たちの努力を高く評価し、日本で学んだことを活かして、実践することが重要」と述べました。

ワークショップの座長であった州保健局のシムリアマナ・チョオンガ局長は、研修生たちの努力を高く評価し、日本で学んだことを活かして、実践することが重要」と述べました。



上：コメントするチョオンガ州保健局長
下：国際ワークショップでの質疑応答



上：コメントするチョオンガ州保健局長
下：国際ワークショップでの質疑応答



オリバー・カオマ医師、日本での薬剤耐性対策研修を語る

2024年11月24日から12月14日まで、国際公衆衛生の専門家であり、チャワマ病院（FLH）の感染予防管理（IPC）担当医師であるオリバー・カオマ医師が、日本の知識共創プログラム（KCCP）に参加しました。

KCCPの「感染予防と管理：薬剤耐性と医療関連感」コースは、日本政府の政府開発援助（ODA）の一環として開催されました。カオマ医師は、カシオペア・プロジェクトを通じて本コースに参加しました。カシオペア・プロジェクトは5年間にわたるプロジェクトで、ルサカ地区の5つの一次レベル病院の病院運営管理能力の強化と医療の質向上を目的としています。

帰国後、カオマ医師は日本の病院運営について「訪問した施設は非常に組織化されており、IPC（感染予防管理）対策基準の厳格な遵守が見られました。スタッフ全員が自らの役割と期待される業務を明確に理解していました」と述べました。

病院経営に関しては、日本は医療システムが分散化されており、資源

管理と配分が効率的に行われていると指摘しました。一方で、ザンビアでは依然として中央集権型の管理が主流で、意思決定が上層部から下層部へと流れる仕組みになっています。

ザンビアの医療施設に導入すべき点について問われたカオマ医師は、「すべての職員が統一された基準を遵守することが重要です」と語りました。医療従事者がIPCの要件を満たせるよう、施設は十分な設備を整え、必要な資材を安定的に供給する必要があると指摘しました。例えば、日本では消毒用アルコールが常に手に入るよう在庫管理が徹底されており、医療施設には感染予防のための専用隔離施設が整備されています。

研修プログラムの一環として、参加者には具体的な行動計画の策定が求められました。カオマ医師の第一の計画は、チャワマ病院の医療従事者およびサポートスタッフに向けた感染予防対策研修の実施です。「一人ひとりが感染予防の重要性を理解すれば、職場の意識や文化が大きく進める予定です。



薬剤耐性トレーニングの修了式で挨拶をするオリバー医師



国立国際医療研究センター（NCGM）にて、世界各国の参加者とプログラム進行役とともに。

知識の定着を測るため、感染予防管理 (IPC) と抗菌薬耐性 (AMR) に関する職員の基礎知識を評価し、研修後の変化を把握することも計画しています。今年後半には、コンプライアンス向上と手術部位感染の低減を目標に、知識の定着度を再評価する予定です。

この行動計画は、抗菌薬耐性 (AMR) および院内感染 (HAI) 対策を担当する医療従事者や行政官が、自国で適用できる効果的な政策や実践を学ぶ機会を提供することを目的としています。また、プログラムを通じた知見が、より頑健な保健システムの構築に貢献することが期待されています。

PHOTO FOCUS



2025年1月30日、KCCP国際ワークショップにて、JICAザンビア事務所の福島浩平氏とマラム・ムクパ氏と話すルサカ州保健局のチョオンガ局長



2025年1月22日、JICA本部地球環境部からの調査団がチバタ病院を訪問。



2025年1月15日、カニヤマ病院の感染予防管理 (IPC) 部門のリンクナース、廃棄物管理のSOPを確認中。



2025年1月23日、歯科部門にて、感染予防管理 (IPC) チームがラウンドを実施。



2025年1月31日にマテロ病院で催された日本の政府開発援助 (ODA) プレスツアーの様子

編集・デザイン: コンベ カパタモヨ

編集: 緒方 敬

編集長: 村井 真介

連絡先

村井 真介 ルサカ郡病院運営管理能力強化プロジェクト チーフアドバイザー

住所: Plot No.11743A, Brenwood Lane,
Longacres. P.o. Box 30027, Lusaka,
10101, ZAMBIA

Cell: +260 765 192 865 (official)